

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

田舎を離れたのは十二年前。大学の入学をきっかけにひとり京都に越してきて、すぐに本屋でアルバイトをはじめた。京都は本好きに優しい街で、古書店も、大型店も、ちよつと変わった本屋もある。それらがお互いのリヨウブンを守りながら、碁盤の目の内にテンザイしている。それぞれの点をシユウユウする生活は楽しく、居心地よく感じていたから、卒業後はそのままこの地に留まって、十年ちよつとの間、本屋として過ごした。

そんな人間が今は農業をやっている。理由はあとで書くとして、一年前から京都で有機農業を営んでいる会社で働きはじめ、農業の勉強をしている。技術を学び、数年後には故郷に戻り、農家として独立することを目標にしている。まだまだ半人前といったところで、周りに助けもらうてどうにかやれている。

どういう理由で農家になったのかと、よく人に聞かれる。切掛けはやつぱり本だった。まだ本屋だった頃、『忠吉語録』という本の案内を見て、面白そうだと思つて自分の店にも仕入れた。忠吉というのは、島根県木次乳業の創業者の佐藤忠吉さんのことで、低温殺菌の牛乳を日本で初めて流通させた、日本の有機農業の草分け的存在である。

一般に流通している牛乳は、120℃〜150℃の高温で殺菌される。保存期間が長くなるので、流通と販売のことを考えれば都合が良いのだけど、この方法だと生乳の風味や有用な菌まで殺してしまう。対して65℃の低温で長い時間をかけて殺菌（パスタライズ）すると、それを活かしたままにすることができる。消化に良いのも特徴らしい。牛乳は好きだけど、飲むとお腹がゆるくなってしまふ体質のぼくも「木次パスタライズ牛乳」はぐびぐび飲めたので、あの黄色と白のパックには見覚えがあった。

数日後、本が届き、休憩時間にパラパラ読んでみると、「百姓とは地べたのことをする仕事。」という一文が目にとまる。その本には焦点を当てるべき言葉が他にたくさん並んでいたけれど、何気ない会話の流れに登場した「地べた」という言葉にとりわけ惹かれた。自分の祖父よりも歳上で、戦争を経験している忠吉さんが使う言葉の先に色々なものが見える。『忠吉語録』は、著者の野津恵子さんはじめ、忠吉さんの言葉を次代に残そうと地元のユウシが集まつてつくった一冊で、すつと健やかな本だった。地に足がついた言葉というものは、こういう、しなやかな強さを言うのだと思つた。農業へ漠然とした憧れを抱きはじめたのはそれからだった。

たしか、三月の頭とか、朝晩がまだ冷える季節に、ナスの種をポケットに入れていたことがあった。夏の野菜の苗を種から育ててみようと思つて調べていると、種に発芽のスイッチを入れるにはちよつど人肌くらいの温度を保つと良いと書いてあったので、名刺くらいの大きさの、封ができるビニールに、湿らせたキッチンペーパーを入れて、それに種を包み、肌身離さずに持ち歩く方法を試していたのだった。親鳥のような心境で、種から白い根が顔を出すのを待ちわびていた。

その日は、デザイナーのAさんが店を訪ねてきた。自作の絵本をつくつたから感想を聞かせて欲しいと言うので、ポケットからメモ帳を取り出そうとして、何気なく例の種が入つたビニールを机に並べた。

「なんですかそれ？ お菓？」

「ああ、これはナスの種で……。」

それまでにAさんと農業の話をしたことがなかつたから、急に種の話になって驚かれた。それから本の話聞いて、別れ際に、いつか農業に携わつてみたいと打ち明けた。後日、Aさんから連絡があった。

「友人夫婦が京都で有機農業をしているんですけど、ちよつど今、求人をしていらっしゃるらしくて、鎌田さんどうですか？」

ポケットの種が生んだ不思議な縁。何千、何万と並ぶ本海から、今まさに読まねばならない本をびたつと見つけ出すような、偶然の嗅覚とどうか、そういう、技術や知識と無関係のところ、人生の分岐をいつもスクわられてきた。農家になったのもそんな偶然からだった。

あれから、色白だった肌が日に焼けたり、体重が落ちたり、ふと鏡を見て、少しづつ変わつていく自分に気がつくことがある。そうやって、仕事に見合つた風貌になっていくのだろうし、体つき以外にも変化を感じるものがあつて、とくに距離や広さの感覚は農家らしくなつてきたと思う。去年の日記を見ると、初日の感想に「畝が長くてビビつた。」と一言だけ書いてあつた。その日の仕事はズッキーニの収穫で、その畝はだいたい70メートルあるのだけど、最初はこれがとんでもなく長く見えた。慣れないうちは、泥濘んだ畝の間を歩くことだつて大変だ。今年の夏は、同じ場所にオクラが植わつている。いつから畑をすいすい歩けるようになったのか、よく覚えていない。

農作業は、自らの体を物差しに世界を見る訓練のようだ。親指から小指の先までちよつど20センチ。握り拳が10センチ。小股の一步が50センチ。大股だと1メートル。畑でいちいちメジャーを使つていられないから、手足を使つて距離を測る。慣れていくと、見ただけでなんとなくの長さがわかる。作物の株間や、畝の長さ、広さ、肥料の計量など、自分の体を規格に世界を観察すると、風景が具体化していつ、最初はあんなに広く、途方もなく感じていた畑が、今は違つて見える。

初めて歩いた時はやけに長く感じた道が、次に通る時にはなぜか短く思えたりする。道や畑がチチんだわけではないから、変わったとすれば自分のほうなのだ。二年目の季節はそんなふうに過ぎていく。

農業の一年目を終えて、そんなことを考えていると友達に話したら、「そういうえば幸田文もそんなことを書いてたよ。」と教えてくれた。彼女の文章を読んでいると、つくづく見る目がある人だなあとと思うのだけれど、樹木の観察についてこんなことを書いている。

去年の晩秋にも、ここへ檜を見にきているのだが、その時から夏にもぜひもう一度と思つていた。そういう思いかたは私に、抜きがたい家庭人の癖がついているからだとおもう。若い頃にしみこんだ、料理も衣服も住居も、最低一年をめぐる経験しないことには、話にならないのだ、とツウカンしたその思いが、今も時にふれて顔をだすのである。

（「ひのき」「木」収録）

筍のあくは椿の葉でも抜けるんでつせ。最近仲良くなった近所の爺さんは、そんな調子で生活の知恵を教えてください。山椒の保存の仕方とか、山菜のこととか、昔の茶摘みの話とか、そんな生きた知恵を仕入れると、来年、同じ季節がやってくるのが待ち遠しくなる。山椒の実が取れたら今度はジンに漬けてみようと、そんなことを随分先のカレンダーに書き込んで忘れないようにしておく。そうやって、いろいろな

美味しいものを知りながら、自分にとって農業と生活が縫い目なく繋がっていけば良い。

幸田文が癖と呼んでいるものは、家事仕事から培われたもので、レイゾウや流通の事情も違う、ひと昔前の家事は今よりもずっと季節に寄り添うものだったんだと思う。一年経って、彼女の「二年めぐらないと確かではない」という言葉の意味がよくわかる。例えば、ネムノキの花が咲く頃にオクラの花も咲くとか、雨が続きとカボチャがみんな腐るとか、それが今回だけのゲンシヨウなのか、それとも、毎年繰り返されるものなのか、季節がひとめぐりしてみないとわからない。春夏秋冬のそれぞれに景色があつて、畑では毎日違うことが起きている。季節の移り変わりとともに生きて、だんだんと野生の暦を学んでいく。

(鎌田裕樹「ポケットの種から」による)

\*注 ジン——香りをつけた酒の一種。

問一 ——線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 ——線部1「そんな人間」とはどのような人のことですか、答えなさい。

問三 ——線部2「切掛けはやつぱり本だった」とありますが、筆者が農家になつたきっかけを答えなさい。

問四 ——線部3「ポケットの種が生んだ不思議な縁」とありますが、どのような「不思議な縁」なのでしょうか。次の説明文のZに入る内容を、それぞれ問題文中の言葉を用いて十五字以上二十字以内で答えなさい。

たまたまデザイナーのAさんに X ことをきっかけに、Aさんに Y ところ、 Z という縁。

問五 ——線部4「距離や広さの感覚は農家らしくなってきた」とはどういうことですか、答えなさい。

問六 ——線部5「そんなことを書いてたよ」とありますが、具体的にはどのように書いていたのですか。問題文中から三十五字程度でぬき出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問七 ——線部6とありますが、「農業と生活が縫い目なく繋がって」とはどういうことですか、答えなさい。

二 次の文章A・Bはいずれも村井理子『本を読んだら散歩に行こう』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

A

ここ数年、料理に対する情熱がどんどん失われつつあった。その理由はいくつか考えられるけれど、「疲れた」というひと言でほとんどすべて説明できるだろう。なにがどう疲れてしまったのかを説明すると、決まって「え、そんなことで？」と驚かれる。そこは盲点だったなあと感心されてしまう。種明かしをすると、私が心底疲れてしまったのは、自分自身の「味」だ。自分が作り出す、何十年も変わらない自分の味に疲れて、嫌気がさし、心底うんざりしている。ため息が出るほど自分の料理に飽きた。豪華なものなんていらぬ。奇抜なアイデアも必要ない。ただただ、私は自分以外の誰かが作ってくれた、なんの変哲もない一皿に飢えている。そして私は、誰かのために作ることに、疲れ切ってしまったのだ。

両親が共働きだったため、小学校の低学年から料理は作り続けてきた。最初はインスタントラーメンぐらいしか作ることができなかったけれど、火の扱いへの恐怖心が徐々に薄らぎ、やがて自信に変わると、次々と新しいレシピに挑戦するようになった。それは料理というよりは、むしろ図画工作や理科の実験に近かった。材料を切つて、火を通して、調味料を加えていくことで、食べることができるようになった。白さと、それを「美味しい」なにかに変えていくことの楽しさにすっかりやみつきになった。私が料理をすると母が驚くのも、兄が褒めちぎるのも、父が残さず食べてくれるのもうれしかった。結局、小学校を卒業するまでに、学校行事に必要な弁当は自分で作ることができるようになった。

料理に対する気持ちが微妙に変化しはじめたのは、私が料理を作ることが、当然のことと受け止められるようになってからだ。大学を出て働きはじめ、結婚適齢期に近づくにつれ、「こんな料理を作ることができるんだね」とか、「ありがとう！」という、シンプルだけれど、私にとつてはうれしい周囲の言葉がピタリと止まった。実の母でさえ、おふくろの味だとか、男性を喜ばせるレシピなんて本を送ってくるようになり、私が母に対して出す料理にも、「もうちょっと甘くしたほうが男の人は好きだよ」とか、「働き盛りの男の人には塩分を多めに。」とか、ことあるごとに言われるようになった。どれだけ作っても、必ずひとつは課題点を見つけられる。その課題点の先にあつたのは、結婚だった。あなたの料理はあなたのためではないと遠回しに言われ続けた私の心のなかで、違和感はずり続けた。

しかし、それを思い出して私が暗澹たる気持ちになるのは、そんな周囲からの言葉を受け入れていたのは、ほかでもなく自分であつたという事実だ。あの頃の自分は、努力しても必ずなにかを指摘され、課題を与えられることに慣れてしまい、それを当然のことだと信じ込んでいた。料理は誰かのために、必ず私がやり続けなければならぬことだと思つていた。今となつては、その頃の自分に心からご苦労さまと伝えたい。そして、誤解を解いてあげたいし、同じ誤解を誰に対しても与えないようにしなければと思う。

子どもが生まれて、作つた料理をあつさり拒絶されることの痛みにも、やつぱり手作りが一番美味しいという呪いの言葉にも慣れ、私はすっかりやさぐれた主婦となつてしまった。小学生の頃抱いていた料理に対するわくわくとしたピュアな喜びなんて美しいものは、すっかり消え去つた。数年前に大病をしてからというもの、料理に対する気持ちは拒絶に近いものとなり、今はもう、手作りVS冷凍食品という論争にも気軽に乗れない程度に、私のなかの「料理」は瀕死の状態だ。

しかし、病を克服したことで私が出た、かけがえのない宝物の存在が、私の頑なな心に小さな声で呼びかけ続けている。そのかけがえのない宝物とは、自分をなによりも大切にするという気持ちだ。自分自身をないがしろにすることが、家族への愛だと勘違いをしていた自分に別れを告げてからは、ただひたすら、自分をいたわるようになった。だから、私はもう一度、料理に向き合おうと決めた。今度は誰かのためではなく、自分自身のために。自分のより良い生活のために。

B

主婦として家事を切り盛りして二十年以上経過するが、最近になってようやく気づいたことがある。なにを今更と思うのだが、私にとってはなかなかどうして大きな発見だった。私が最も得意としていたもの、ここ数年で完全に熱意を失い、気持ちが冷め切ってしまった家事、その料理についてである。

なぜ料理がそこまでつらくなってしまったのか、自分なりにしっかりと考えてみた。まずは、自分の味に飽きたことがひとつ。そして、拒絶されるのがつかり感に、そろそろ疲れてきたのがもうひとつの理由だった。料理本とにらめっこして、どれだけ工夫を重ねても、新しいメニューにチャレンジすればするほど、「美味しい料理を作らなければ。」という強い思い（そして重い）だけが空回りしたと気づく、あの瞬間である。

さあどうぞ、食べてみて！ と張り切って出したとき、例えば子どもが微妙な表情をしつつも、「美味しいよ。でもお腹がいっぱいなんだ。」と、私に対する優しさを最大限に発揮して言ったとする。そして実際に息子たちは、そう言う場合が多い。そこで私はがっかりするのだが、同時にとても気の毒になって、そのうなじわじわと腹が立つのである。この、がっかり・気の毒・腹が立つのコンボが、二十年ほどのときを経て私を打ちのめしたのだと気づいた。大げさだが。

そしてなにより、「軽く腹が立つ自分」にも、軽く腹が立つ。なぜかというところ、そこに「作ってやったのだから、喜んで食べるのは当然だ。」みたいな、自分のエゴの存在をちらりと感じてしまうからだ。そして、その私の一方通行な気持ちを汲み取った子どもが、「美味しい。」と言わねばならぬシチュエーションを作っている、そんな自分が嫌になる。

それじゃあどうすればいいんだよ……私が子どもの立場だったら、一〇〇%そう言うだろう。私だったら、絶対に、はつきりと、辛辣に言う。母さんは考えすぎじゃないの？ そんな一方的な思いを押しつけられても、こっちだって困る。っていうか、重すぎるよ、その気持ち。べつに、手の込んだものを作ってほしいなんて言っていないよね？ 簡単なものでいいのに、勝手に焦っているのはそっちじゃん……私だったらこのように、流れるように言いますね。というか、言ったことがあります、実の母に。

自分の子ども時代を回想しつつ、熟考を重ねたとある日の夕方、私はとうとう最後の真実に辿りついた。私という人間は、料理だけに限らず、なにかと「考えすぎである」ということに。読者の皆さんはここで、「ようやく気づいてくれたか。長い道のりだったな。」と思われるだろう。とにかく私は、自分の気持ちが先行し、それが常に空回りするのだ。特に、相手が自分の子どもだと、その傾向が顕著であると認めざるを得ない。だから私は自分自身に、肩の力を抜くこと、そしてなにより、「皿の上に自分の念まで盛り付けない」という掟を定めた。二十一年目にして解脱である。

ということ、最近のわが家の食卓は、週の半分がミールキット（食材が下ごしらえをした状態で届き、仕上げ作業だけでメニューが完成するよう工夫されたキット）、そして残りの半分が究極にシンプルなメニューで構成されている。シンプルなメニューがどんなものかというところ、新米がとても美味しい時期だから、塩むすびである。炊きたてのご飯を、少し強めの塩で握って、パリパリの海苔を巻く。それだけなのになんと、「うまい！」という声上がるではないか。味噌汁は、良い出汁パックを使って作れば、卵を溶いて葱をぱらりと入れるだけで、「うわあ、美味しい。」となる。ゆで卵をマヨネーズのチューブと一緒に、ドン！ とテーブルの上に出すだけで食卓が盛り上がる。じゃがいもをオーブンに三十分ほど放り込み、バターと塩を添えて、こちらもドン！ と出すだけで、もうそれでいいのである。なぜ今までそうしなかったのか。新米と塩とマヨネーズ。この三つがあれば勝てる。まんぷく三銃士と呼びたい。素材が良ければ当然勝率はアップする（これ、とても重要）。

そしてもちろん、自分が本当に好きなメニューもどんどん作る。自分のために作る。バターを溶かしたフライパンに卵を流して作るスクランブルエッグとか、長芋のステーキとか、甘くて大きなお揚げが入ったきつねうどんとか、そんなものである。

考えに考え、勝手に傷つき、ぐるりと回って私は再びスタートラインに立つことができた。料理と向き合う日々は続いている。

問一 — 線部1「疲れた」とありますが、筆者は何に「疲れた」のですか。文章Aから二つぬき出して答えなさい。一つは十三字、もう一つは十字です。

問二 — 線部2「あなたの料理はあなたのためではない」とありますが、ここで筆者が作ることを求められている料理はどのようなものですか、答えなさい。

問三 — 線部3「料理に対するわくわくとしたピュアな喜び」とはどういったものですか、答えなさい。

問四 — 線部4「とても気の毒になって」とありますが、筆者はどうしてそのような気持ちになるのですか。理由を説明しなさい。

問五 — 線部5とありますが、「皿の上に自分の念まで盛り付け」とはどういうことですか、答えなさい。

問六 — 線部6「勝率はアップする」とはどういうことですか、答えなさい。

問七 — 線部I「私はもう一度、料理に向き合おうと決めた」・II「料理と向き合う日々は続いている」とありますが、この結果筆者の作る料理はどのようになりましたか。文章A・Bをふまえて答えなさい。

三 次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

あなたに 秋村宏

1 ずいぶんカドがとれましたね  
この頃

そう言われることがある  
若い時とは違うし

それに人生というものもわかつてきたし

そうつぶやいてから

そのわたしをじっとみているあなたに気づく  
そういえば

わたしの好きな言葉は

だった

2 夢とか希望とかを話しあう時

声こゑが小さくなっていないか

怒おこったり笑わらったりする時

心が深くついていかなくなっていないか

なぜ

3 カネとかモノのあたたかさに

ひたっていたいのだろう

わたしが望んでるのは

この憤いきどおりに満ちた世界を変えることなのに

でもそれが普通ふつうなのではないか

わたしはいつも世間の誘惑ゆうわくのなかにいて

あなたはいつも未来や人間の豊かさの側にいる

だからわたしは

4 あなたにじっとみられるのが嫌いではない

5 どうか手を強く握にぎってください

丸まるくなって座すわっているようにみえても

生きる意味を問いつづけることはできる

あなたと話すために

いつも始まりの言葉を探しているのだから

(『生きものたち』による)

問一 — 線部1「ずいぶんカドがとれましたね」とありますが、「カドがとれる」とはどういう意味ですか、答えなさい。

問二 詩中の [ ] に入る言葉として最も適当なものを次のア、ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち着おちいている
- イ 変かはわっている
- ウ 尖とがっている
- エ 弾はじんでいる
- オ 曲まがっている

問三 — 線部2「声こゑが小さくなっていないか」とありますが、ここでの「声こゑが小さくなる」の意味として最も適当なものを次のア、ウから選び、記号で答えなさい。

- ア 考えが浅あくなる
- イ 体力たいりきがなくなる
- ウ 立場たてばたが弱よくなる
- エ 他人たにんに迷惑めいわくがかかる
- オ 熱意ねついがなくなる

問四 — 線部3「カネとかモノのあたたかさ」を言いかえた言葉を、詩中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問五 — 線部4「あなたにじっとみられる」とありますが、

A 「あなた」とはどんな存在존在ですか、答えなさい。

B 「あなたにじっとみられる」とはどうすることですか。Aの問いをふまえて答えなさい。

問六 — 線部5「丸まるくなって座すわっている」とはどのような様子のたとえですか、説明しなさい。

